The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

般若経類の śūnya と śūnyatā
――『般若心経』の解明――

阿　理　生

[1] *Prajñāpāramitāhṛdaya* いわゆる『般若心経』(以下『心経』と略) の前半部に説かれる，rūpaṃ śūnyatā śūnyataiva rūpam……という一連の句とその空思想は，他の関連の般若経類（大品系）にも見出される．その叙述において śūnya でなく śūnyatā の語が使用される点に，看過できない問題がある．śūnyatā の意義究明は，般若経類と『心経』の空説を読み解く重要な鍵となるであろう．

[2] 『心経』や般若経類の śūnyatā に関する近年の主な研究には次のものがある．

(a) 村上真完「般若経類の空思想とウパニシャド」[1)]

(b)　　同　　「色即是空（rūpaṃ śūnyatā）原意考」[2)]

(c)　　同　　「空性（śūnyatā，空であること）考」[3)]

(d) 今西順吉「空と空性について」[4)]

(e) Yoke Meei Choong: *Zum Problem der Leerheit* (*śūnyatā*) *in der Prajñāpāramitā*.[5)]

『心経』の śūnyatā が Max Müller によって 'emptiness' と訳出されて以来，研究者による各種翻訳・解説そして上記の近年の研究に至るまで，その śūnyatā の語が，śūnya にとっての本質・属性としての〈空たること・空性〉を表わす抽象名詞とみなされ続けてきた．実名詞の rūpa（目に見える色形あるもの）等と śūnyatā とが〈主語―述語〉や〈述語―主語〉の関係で，同格な表現がなされる事実について，例えば上記 (b) 論文では，「色と空であること（空性）という，二つの事項を同視（同置）する立言である」とし，その可能性をブラーフマナやウパニシャドにおける，異なる二つのものを同置（同視）する思考法に求め，そのような思考法を般若経類も共通にしているところがあると考えてはどうか，と提言している．(d) 論文でも，日常的表現としては理解不能なそれが実は rūpa と śūnyatā との不二（advaya）を意味するのだ［以上趣意］，と主張する．いずれにしても śūnyatā が何の疑いもなく〈空たること・空性〉の意味の抽象名詞と受け取られている所に実は大きな問題があるようである．śūnyatā そのものの意味がまず問われるべきである．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

文法の面から見てみよう．Taddhita 接尾辞としての -tā, -tva は，名詞や形容詞に添加されて抽象名詞を作り，その意味は抽象的な本質・性質・状態・機能などからさらに集合名詞また具体的事物にまで広範囲に及ぶ．例えば，

sattva［存在していること・状態］>具体的な［存在物（n）；存在者（m）］

devatā［光り輝くこと・状態；神たる状態，神性］>［神たる者；威光ある有力者］[6]

bandhutā［結合；血縁関係］>［（集合的）親類縁者］[7]

など[8]のように，śūnyatā も

［空であること，空性；空なる状態］>具体的な［空なる状態のもの，空虚物］という意味の変移（shift）が文法的に充分可能であるように思われる．以上の推定が実際の文脈に合致するかどうか検証を要する．

[3] まず『心経』本文前半の原文（校訂上の問題を含む）を必要箇所のみ引用すれば，

āryāvalokiteśvaro bodhisattvo gaṃbhīrāyāṃ prajñāpāramitāyāṃ caryāṃ caramāṇo vyavalokayati sma : pañca skandhās, ① tāṃś ca svabhāva-śūnyān paśyati sma.

iha Śāriputra ② rūpaṃ śūnyatā, śūnyataiva rūpam. ③ rūpān na pṛthak śūnyatā, śūnyatāyā na pṛthag rūpam. ④ yad rūpaṃ sā śūnyatā, yā śūnyatā tad rūpam. evam eva vedanā-saṃjñā-saṃskāra-vijñānāni.

iha Śāriputra ⑤ sarva-dharmāḥ śūnyatā-lakṣaṇā anutpannā aniruddhā amalāvimalā nonā na paripūrṇāḥ. tasmāc Chāriputra ⑥ śūnyatāyāṃ na rūpaṃ na vedanā na saṃjñā na saṃskārā na vijñānaṃ. na cakṣuḥ-śrotra-ghrāṇa-jihvā-kāya-manāṃsi, na rūpa-śabda-gandha-rasa-spraṣṭavya-dharmāḥ, na cakṣur-dhātur yāvan na mano-vijñāna-dhātuḥ. [na vidyā] nāvidyā [na vidyākṣayo] nāvidyākṣayo yāvan na jarāmaraṇaṃ na jarāmaraṇakṣayo na duḥkha-samudaya-nirodha-mārgā, na jñānaṃ na prāptiḥ.（以下略）

（中村元・紀野一義訳註『般若心経・金剛般若経』岩波文庫中の小本校訂梵文.[9]
今便宜上付した番号は次に引用する『一万八千頌般若』と対応している.[10]）

『心経』前半部の思想表現に最も関係が深いとみなされうる所の*Aṣṭādaśasāhasrikā-P°*（『一万八千頌般若』）の関連文を以下に掲げる．［紙幅の都合で Tib. からの和訳のみを出し，Skt. の現存する『二万五千頌般若』を参考にした還梵を添える．文中の番号は上引の『心経』中の番号に対応する．下線実線部は文言のほぼ完全対応を，下線破線部は内容的対応を示す.］

A 「①色（rūpa）は色の自性の点で（svabhāvena）空である（śūnya）が，空なる状態のもの（＝空虚物）の点では（śūnyatayā）色は空ではない（na rūpaṃ śūnyaṃ），……（中略）……色の空なる状態のもの（yā rūpasya śūnyatā），それは色ではない（na tad rūpam）．③空なる状態のものと異なって色は無い（śūnyatāyā na pṛthag rūpam）．②色こそは空なる状態

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

のものであり（rūpam eva śūnyatā），空なる状態のものこそが色である（śūnyataiva rūpam）[11]．……⑤自性無きものには，生無く，滅無く，減少無く，増大無く，雑染無く，浄化が無いからである．それはどうしてか．色は幻の如きものであり（māyopamaṃ rūpaṃ），……」

［以上『一万八千頌』第3章，Tib.，北京版 Ni 21a-b; デルゲ版 Ka 23a-24a. また類似文が第10章，北京 Ni 96b6-97a; デルゲ Ka 103b に見える．漢訳『大般若波羅蜜多経第三分』大正蔵 7, p.433b; p.465a. cf.『一万頌』Tib.，北京 Bi 23a-b; 33b. このうち 33b3 には③の文の前半に「色と異なって空なる状態のものは無い（rūpān na pṛthak śūnyatā）」の句があり『心経』③の文に合致する．『一万八千頌』本来の形態を想起させる．『二万五千頌』T. Kimura 刊本，I ～ 1, p.53, ll.9-p.54.（及び p.63, *l*.30）］

B 「……色の空なる状態のもの，それは色ではない（yā rūpasya śūnyatā na tad rūpam），……色の空なる状態のもの，それは色形をなさない（yā rūpaśūnyatā na sā rūpayati）．……③色と空なる状態のものとは別々でない（nānyad rūpam anyā śūnyatā），空なる状態のものと色とは別々でない（nānyā śūnyatā anyad rūpam）．②色こそは空なる状態のものであり（rūpam eva śūnyatā），空なる状態のものこそが色である（śūnyataiva rūpam）．……⑤空なる状態のもの（śūnyatā），それは実に生ぜず，滅せず，雑染無く，浄化無く，減少無く，増大が無い．……⑥このようなもの（īdṛśī = 空なる状態のもの［śūnyatā］），そこには（tatra），色無く，受無く，……無明無く，……老死の滅無く，苦（duḥkha）無く，集（samudaya）無く，滅（nirodha）無く，道（mārga）無く，得（prāpti）無く，現観無く，……」

［『一万八千頌』第3章，Tib.，北京版 Ni 26b-26(2)b; デルゲ版 Ka 29a-30a. 漢訳，大正蔵 7, p.435b-c. cf.『一万頌』Tib.，北京版 Phi 260a-262a.『二万五千頌』I ～ 1, pp.63-65.］

以上の『一万八千頌』の引文[12] A・B のような定型的表現は，般若経類の最古形とされる *Aṣṭasāhasrikā-P°*（『八千頌般若』：漢訳『道行般若経』）には見出されないが，*Daśasāhasrikā-P°*（『一万頌般若』）にも，*Pañcaviṃśatisāhasrikā-P°*（『二万五千頌般若』）にも多少出入はあるが，ほぼ同文に近いものが含まれている（今は『十万頌般若』を考慮に入れなくてよい）．それでは『心経』前半部成立に関わる所依の経は特定可能であろうか．次の二点から推定されうる．第一点は，B-③の anya による表現は，『一万頌』にも『二万五千頌』にも存しつつ，他方 A-③の pṛthak による表現は，『一万頌』（北京版 Bi 23b1; 33b3）に存するが，『二万五千頌』（I ～ 1, p.53, ll.20ff）では anyatra による表現に代わっている．『心経』③の用語も pṛthak であること．第二点は，B-⑥の文中で無明から老死までの十二縁起支に続く苦・集・滅・道の直後に得（prāpti）が言及される配列の仕方[13]（『二万五千頌』も同じ）は，『心経』⑥の配列に近いこと．他方『一万頌』では苦・集・滅・道の後に十二縁起支が続

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

いた後に得（prāpti）が言及される（北京版 Phi 262a1-3）．これら二点から総合的に判定して，今『一万八千頌』が『心経』前半部の成立に関与している可能性が最も高いと言えよう．

[4] 以上の検討結果からして，『一万八千頌』と『心経』との比較対照は，そこに含まれる śūnyatā の意味の検証に極めて有効であるに違いない．

『一万八千頌』B-⑤の「生ぜず，滅せず，……」に対する主語 śūnyatā が，『心経』では sarvadharmāḥ śūnyatālakṣaṇā に換言されている事実は，śūnyatā が，抽象的な「空性」ではなく，具体的な「空なる状態のもの＝空虚物」の意味に受け取られていたことを証する．『一万八千頌』の漢訳（『大般若波羅蜜多経第三分』大正蔵 7, p.435b）でも，śūnyatā 相当部が『心経』（玄奘訳）と同じく「諸法空相」で訳出されているのが注意される．『一万八千頌』A-⑤でも「自性無きものには（asvabhāvasya），生無く，滅無く，……」とあり，意味上の主語が asvabhāva で表現される．a-svabhāva（自性無きもの［Bv.］）とは svabhāva-śūnya（自性の点で空なるもの）に他ならない．

そしてまた，②の〈rūpa は śūnyatā である〉という表現とまた並行して，A-①の〈rūpa は śūnya である〉という表現が混在する事実は，śūnya と śūnyatā とに意味上の差異が無いことを物語る．次の事実も傍証となるであろう．すなわち，②の〈rūpa は śūnyatā, śūnyatā は rūpa〉という定型的表現は，『八千頌』（Vaidya 本 p. 8）の〈rūpa は māyā（幻），māyā は rūpa〉に由来すると見て間違いないが，初期般若経の幻説から大品系の空説が展開する過程を推定して，「形容詞 māyā-upama が形容詞 śūnya へ，さらに抽象名詞 māyādharmatā から抽象名詞 śūnyatā が展開したと推定される」（鈴木広隆「般若経の空思想」印度哲学仏教学 5, p.152. 平成 2［1990］）というのは適切でない．なぜなら，『八千頌』のかの〈rūpa は māyā, ……〉の幻喩説が，また全くそのままに後の『一万頌』（北京版 Phi 283b6-7; デルゲ版 Ga 58b2-3）にも『一万八千頌』（北京版 Ni 91b6-7; デルゲ版 Ka 98a3; 漢訳，大正蔵 7, p.464b）にも，māyā ＞ māyā-tā, -tva という変化無く『八千頌』同様に説かれているのを見出すからである．上記引用『一万八千頌』A の尾部でも，rūpa は māyopama（幻の如きもの）と説かれる．つまり，〈rūpa は māyā〉と〈rūpa は śūnyatā〉とが並行している事実は，māyā と śūnyatā との意味の同質を証する．

一般に漢訳は Tib. 訳に比較して曖昧と評される場合もあるが，『心経』や関連の般若経類の当該箇所では，諸漢訳は śūnya と同様 śūnyatā に対して「空」の訳語を当てているのは適正だと評しうる．かの śūnyatā に対し〈emptiness；

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

Leerheit；空たること；空性〉などと抽象的に訳出する近現代の研究者にこそ重大な誤解がある．

上引『一万八千頌』A・B における śūnyatā を仮に śūnya に置換えたとしても，思想的内容や論理に大きな不都合や矛盾は生じない[14]のであるから，少くとも『心経』とその関連文の範囲において，śūnyatā の意味は śūnya（空なるもの）とほぼ同義とみなして差しつかえない．そしてそれは内容的には『心経』①（cf. A-①）のような svabhāva-śūnya（自性の点で空なるもの）に等しい．

それでは，形容詞のままに名詞的な śūnya（空なるもの）［中性名詞とは別］の同義異語として，名詞である śūnyatā の用語が別に必要とされた理由は何であろうか．二つの主な理由が考えられる．一つには，文意を鮮明ならしめ無用の誤解を避けるため．例えば，上引『一万八千頌』A の冒頭部の śūnyatayā na rūpaṃ śūnyaṃ がもし śūnyena na rūpaṃ śūnyaṃ とあれば，文意が不鮮明となる恐れがあろう[15]．二つには，『八千頌』第 1 章に説示される所の，〈一切諸法に執われない（sarvadharmānupādāna[16]）という広大にして尊ばれる，量の限られることのない，一切の声聞・独覚と共通でない三昧〉に住しつつ菩薩大士は速かに無上正等菩提を得る[17]という，無執着の基本教説の中で，例えば〈色は空である（śūnya）〉と見るのも執着とされる[18]．śūnya は分別判断の述語形容詞ともなることから，文脈次第では śūnya の語を避けた表現が必要とされたため，とも推察される．

1）真野龍海博士頌寿記念論文集『般若波羅蜜多思想論集』平成 4（1992）所収．
2）佛教論叢 36，平成 4（1992）．　3）佛教論叢 39，平成 7（1995）．　4）『インドの文化と論理　戸崎宏正博士古稀記念論文集』平成 12（2000）．　5）（Europäische Hochschulschriften, XXVII/97, 2004）pp. 80-92.　6）Cf. 中村元『ブッダ　神々との対話—サンユッタ・ニカーヤ I —』昭和 61（1986），p.223; pp.342-347．また拙稿「仏教サンガをとりまく祈りの原風景—その諸問題—」日本仏教学会年報 70, pp.6-7.　7）Cf. Pāṇini, 4. 2. 43.　8）*Trisvabhāvakārikā*『三性偈』（『山口益仏教学文集　上』昭和 47（1972）改訂再録．初出は昭和 6（1931））は S.Lévi がネパールで発見し手写したノートから山口益が出版したもので，その冒頭での写経生による，prācīnatā-patra という表現が注意される．この prācīnatā は，ここでは抽象的意味でなく具体的事物としての「古い状態のもの」を指している．因みに，英語の antiquity も抽象的「古さ」から具体的「古文物［pl.］」としての古文書や遺跡・遺物等の意味までを広く表わす．なお，prajñāpāramitā の -tā の意味については，拙稿「pāramitā（波羅蜜）の語源・語義について」印仏研 54-2，平成 18（2006）参照．　9）白石眞道「般若心經略梵本の研究」日佛年報第 12 年，昭和 15（1940）中の校訂梵文は，『心経』前半部に関しては写本に根拠無き挿入があるので底本としての採用を見合わせた．　10）引用文中カギカッコで括った文句は，

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

『一万八千頌』との比較で，本来無いことが今回判明した箇所である． 11）デルゲ版 Ka 23b6 には…ma yin とあり否定辞を含むが文脈に合わない．北京版が正しい．
12）なお鈴木広隆「般若経における空の教説—『二万五千頌般若』I, 2, 2 satya-avavāda を中心として—」印度哲学仏教学 2，昭和 62（1987）にはすでに『心経』関連の空説が抽出されているが，『二万五千頌』が中心にされる点と，śūnyatā が従来通り「空性」とされる点，そして『一万八千頌』の上記引文の B-⑥の文が北京版では Ni 26b8（p.216）から Ni 26(2)a（p.319）に飛ぶのを見落として「文を欠いている」と言い『一万八千頌』が特異な存在と誤解される点など問題を含む．今ここに鈴木氏とは別の新たな観点から『心経』関連の文を『一万八千頌』から抽出引用したものである． 13）漢訳，大正蔵 7, p.435c も同様． 14）逆に śūnyatā を抽象的「空性」と理解するときにこそ不都合が生じる．例えば，『一万八千頌』A・B 引文中の yā rūpasya śūnyatā, na tad rūpam. における śūnyatā ≠ rūpa の構造がまた直後に rūpa = śūnyatā, śūnyatā = rūpa という同置関係に変わるのは矛盾である．この矛盾は rūpasya śūnyatā を〈色が空であること〉と理解することに起因する．その -tā が抽象名詞でなく具象名詞であるとき矛盾は解消する．rūpasya śūnyatā の rūpasya という Gen. は意味上の主語でなく構成材料を示す Gen. であり，かの句は〈色の（色から成る）空なる状態のもの（空虚物）〉と読解される．般若波羅蜜は pāramitā という洋上を航海する船団を譬喩とすることから，その経説は洋上航海とも深く結び付いている．洋上ではしばしば地平線に陸のような雲が現われそれに執われると方向を誤る．それは陸の色・形から成る陸のような空虚物であり（yā rūpasya śūnyatā），それは陸ではない（na tad rūpam）というように空説の原風景に重ね合わせてみることもできよう（もちろんこれにとどまらないが）．ところで，本文[2] に掲げた今西論文 pp.30ff で『八千頌』の yo rūpasyānutpādo na tad rūpam.……anutpādaś ca rūpaṃ ca advayam……中の rūpa と同置の anutpāda を anutpannatvam として理解してあるのは正しくない．動詞起源の名詞はその動作の結果をも表示しうるからである．ここでは anutpāda は〈生起しないもの〉であり，rūpasyānutpāda とは〈色が生起しないこと〉ではなく，〈色の（色から成る）不生起物〉である．rūpa と anutpāda の関係は rūpa と śūnyatā のそれに重なる． 15）パーリ『小空経』の suñña, suññata, suññatā との使い分けも同様な事情がからんでいる．別稿にて論証を必要とする． 16）『八千頌』Vaidya 本 p.5, l.5 では, sarvadharmāparigṛhīta. 17）同上, p.7, ll.11-13. 18）同上，p.6, l.18; p.7, l.1. etc.『一万頌』北京版 Phi 243a8; 254b8. etc.『一万八千頌』北京版 29a2. etc.

〈キーワード〉 *Prajñāpāramitāhṛdaya*,『般若心経』, śūnya, śūnyatā, 空

（九州大学大学院非常勤講師）

NII-Electronic Library Service